

聖書：マタイ 5：43～48

説教題：天の父の子ども

日時：2018年6月10日（朝拝）

イエス様は5章20節でこう言われました。「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」この律法学者やパリサイ人にまさる義とはどういうものなのか、イエス様は21節以降で、当時の教えと比較しながら述べておられます。今日の43節以降でも、まず当時の教えが先に述べられています。43節：『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」さて私たちはこれを聞いて、こんな言葉は旧約聖書にあったらと思うかもしれません。前半の「あなたの隣人を愛しなさい」という言葉は間違いなくあるのは分かりますが、後半の「あなたの敵を憎め」なんて言葉はあったらと思うかもしれません。答えは、この通りの言葉はないということです。なのに当時このように教えられていました。それはこういうことだったようです。聖書は「あなたの隣人を愛せよ」と言っている。ということは隣人でない人はそこまで愛さなくても良いということである。そこで重要になって来るのは私の隣人とは誰かということです。当時のイスラエル人は、隣人とは基本的に同国人のことだと理解しました。すなわち同胞イスラエルは兄弟として愛すべきだが、異邦人はそうでない。では彼らを「積極的に憎め」という解釈はどうやって出て来たのでしょうか。それは旧約聖書にあるカナン人の根絶命令や、呪いの詩篇と呼ばれる詩篇の誤った解釈からと考えられます。

旧約聖書にはイスラエルがカナンに入国する際、そこに住む先住民をすべて聖絶せよと主が言われた記事が出て来ます。表面的に読むと、ここから隣人ではない者、すなわち異邦人を憎め！という解釈が出て来たのも理解できないわけではありません。しかし聖書を良く読むなら、彼らは異邦人だったから聖絶されたのではありませんでした。それは彼らの積もりに積もった罪に対するさばきとして行われたことでした。イスラエルはその彼らに対する神のさばきの道具として、さばきの使いとして、その地に入ってしまったのです。同じ原理は時にイスラエルにも適用されました。彼らが非常な罪を犯した場合、イスラエル自身も聖絶されました。このようにこれは神のさばきに属することであって、私たちが誰かを勝手に敵として設定して、その人を憎むようにと教えるものではありません。

また呪いの詩篇も誤って解釈されたと考えられます。たとえば詩篇 139 篇 21 節～22 節にこういうダビデの歌があります。「主よ私はあなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。あなたに立ち向かう者を嫌わないでしょうか。私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。」ここに「敵を憎むべきこと」がはっきり述べられているのではないかとある人は思うかもしれませんが。しかし一般に「呪いの詩篇」と呼ばれる詩篇は、単なる個人的な怒りや、恨みつらみを吐露したものではありません。それは自分のためではなく、神と心が一つになっている人がひたすら神の栄光を求める敬虔な思いからのみ歌った言葉です。ですからこれも私たちが安易に自分の敵だと思ふ人に当てはめて用いて良いものではありません。

イエス様はこのような当時の教えを取り上げた後、「しかし、わたしはあなたがたに言います」と言って、律法本来の意味について語って行かれます。44 節：「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」これは前回の箇所よりも、さらに先に進んでいます。前回は「あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい」と言われました。しかし今日の箇所では、仕返しをしないという消極的な態度だけではなく、積極的に「敵を愛せよ」と言われています。「迫害する者のために祈りなさい」と言われています。私たちは誰かにひどいことをされたり、言われたりすると、その人に対する怒りで心が一杯になります。そして私がこれだけ傷ついた分、あの人もそうなりと良い。またこの次に会った時、どのように反撃してやろうかなどと考えるものです。その気持ちを抑えるだけでも大変なのに、イエス様はその人の祝福のために祈りなさいと言います。そして真心からその人を愛する歩みに進みなさいと言います。これは現在時制で書かれています。ですから一回祈ったからもう良い、一回何かをしてあげたから私はすべきことをしたということにはならないということです。継続してそのことをし続けなさい。私たちはこう聞くとたまらなくなつて叫び出しくなります。一体だれにこんなことができようか！イエス様には従っては行きたいが、これは何と無茶で重たい注文かと思うのです。

しかし、イエス様は続く 45 節で素晴らしい励ましを語って下さいました。「天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」ここから分かることは、私たちがこの道に歩む時、そうしているのは私一人ではないということ

す。私よりももっと深い意味で、すでにそのように生きている方がおられる。それは私たちの天の父です。子どもは親に似るものです。幼稚園や小学校で子どもの卒業式などに参加すると、親と子を見比べて、やっぱり似ているな～と思います。あるいはある教会の牧師に電話をすると、電話に出た人が先生なのか、その子どもなのか判別できないことがしばしばあります。そのしゃべり方、イントネーションが全く同じ。そのため、こちらから電話をかけたのに、「あの～どちら様でしょうか」などと尋ねたりしてしまう。

では私たちの天の父はどのような方でしょうか。ここに「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」とあります。私たちはこれを読んで不思議に思うかもしれません。そうは言っても正しい人にだけ太陽を上らせ、また雨を降らせるなんてことはできるのだろうか。しかし神にはそれができることの実例が聖書にあります。たとえば出エジプト記に記されている10の災害の内、エジプトは三日間真っ暗闇となり、誰も互いを見ることができなかった時がありましたが、イスラエルが住むところにだけは光がありました。また雨についてはギデオンになされた奇跡が思い起こされます。彼が1頭分の羊の毛を地面に置き、明日の朝、この羊の毛だけに露が降りていて全地は乾いているようにして下さいと願ったところ、その通りになりました。そこで次の日はその反対にしてくださいと願ったら、今度は地面全体に露が降りていたのに羊の毛だけは乾いていました。ですから神はご自身が望む人にのみ太陽の光を与え、また雨を降らせることができます。なのに神は悪人にも善人にも、この恵みを与えておられる。なぜでしょうか。いちいち区別するのが面倒だからでしょうか。それは神の私たちに対する愛とあわれみのゆえだ、とイエス様は仰っています。朝になって太陽が上り、また乾いた地に雨が降り注ぐのは単なる自然現象ではない。そこに示されているのは神のいつくしみです。しかも神はご自身を認めず、神などいないと言って反抗して歩んでいる者たちのためにもそうして続けておられる。ここに敵をも愛しておられる私たちの天の父のお姿があるのです。

もちろんこのことはすべての人が救われるということの意味しません。聖書は最後のさばきがあると語っています。イエス・キリストを信じる以外に救いはないと言っています。しかしその日まで神はなお、ご自身に従わず、逆らう者たちをも顧み、太陽と雨を与え続けている。この天の父の性質を私たちもその子どもたちとして映し出すように！と言われているのです。

イエス様は 46～47 節でこう言われます。「自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。

また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。」これは取税人や異邦人の生き方だと言われていますが、私たちも自分を振り返るとまさにこのように生きていると思わされるのではないのでしょうか。私たちは今、誰かと良い関係にあると思います。自分はその人と愛の関係に生きていると思う。しかし良く考えると、自分がその人を愛しているのは、その人が自分に良くしてくれているからではないのでしょうか。反対から問うなら、私たちは自分に良くしてくれない人、良い顔を向けてくれない人に良くしているのでしょうか。それでもその人を愛する生活をしているのでしょうか。こう考えると結局、私たちも相手が良くしてくれるのでこちらも良くしているだけ。とするなら何のすぐれたこともしていないことになります。このような生き方は見方を変えれば人に支配されている生き方だとも言えます。相手がどんな態度で自分に接して来るかによって、こちらの態度も決めるという生き方は結局、相手に振り回されている生き方ではないのでしょうか。

私たちが思うべきは、イエス様はただ高貴な道徳を語られたのではなく、ご自身、この通りに歩まれたことです。十字架に張り付けにされ、その手に釘を打ち込まれた時、イエス様は何と言われたのでしょうか。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」と祈られました。自分を殺し、そのいのちを取ろうとする、まさに迫害する敵のためにイエス様は祝福を祈られました。ひどいことをされたのに、だからと言って相手に自分の心を支配されていません。これは天の父を映し出す、まさに神の子としてのお姿でした。

それでもある人は、イエス様と私たちは違うのであって、ここまでのことは私たちにはできないと言うかも知れません。しかし聖書にはこれと同じように行動した人が出て来ます。使徒の働き 7 章に出てくるステパノです。彼はユダヤ人によって石打ちにされる時、「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と祈って天に召されました。ですから私たちに簡単にできないとは言えないのです。また歴史の中にもたくさん、迫害する敵のために祈り、善を返した信仰の先達たちの例を私たちは見出すことができるで

しょう。

最後の 48 節は 21 節以降のイエス様のおことばのまとめの言葉であり、その頂点となる言葉です。「ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。」  
「完全」と聞くと、私たちは気後れしてしまいます。どうしてこの私に「完全」という言葉があてはまるだろうか。これは不可能な要求である。そうしてこの言葉は見なかったことにおきたい、聞かなかったことにしておこうという気持ちも起きて来るかもしれません。しかしこれは私たちに素晴らしいメッセージを語っているものです。この御言葉を考える上での基礎は、創世記で私たち人間は神のかたちに造られたと言われていることです。人間は罪がない「非常に良い」状態に造られましたが、最初から最終状態に造られたわけではありませんでした。神と交わり、神と共に歩むことによって、神のかたちを益々発展させ、そうして最終的な状態に達するようにと、その道のりのスタート地点に置かれました。しかし人間は罪を犯して、この栄光の道から落ちてしまいました。しかし神はキリストにあって、この本来の道に私たちを立ち返らせてくださるとというのが聖書のメッセージです。そのゴールがここにある「天の父が完全であるように、私たちも完全な者となる」ということです。神のかたちが十分に発展を遂げた最終状態のことです。ここが私たちの到達すべき最終地点であり、ここまで行くことが、私たちに用意されている救いの中身なのです。私たちは自分をそのような者として考えているでしょうか。実に聖書が述べる人間とは、このようなものです。私たちはこれは人間には無理な話だよ、私たちにはほとんど関係がない話だよと言ってはならないのです。むしろ人間はどういう存在として造られたのか、どれほど高貴な存在であるのか、私たちは自分についての考えを改めてなくてはならないのではないのでしょうか。神のかたちに造られた人間は、この 48 節のゴールに到達すべき者たちです。イエス様により頼む者はみなそこまで導かれる者たちなのです。

もちろん地上にある間、私たちは最終的な完全に達することはありません。ですから山上の説教冒頭の 5 章 3 節に「心の貧しい者は幸いです」とありました。またこの後 6 章 12 節で、「私たちの負い目をお赦してください」と日ごとに祈るように教えられます。しかしこの 48 節にある素晴らしい目標を見失ってはならないのです。私たちはイエス様によって必ずそこまで回復させていただけるのです。これは私たちが絶えず見つめて励ましを受ける大いなる目標であり、私たちに希望を与える約束の御言葉でもあります。

この聖書のメッセージを心に刻んで私たちはここで言われていることに取り組みたいと思います。今日の箇所で言われていたのは敵に対する態度です。私の敵とは、私と関係がうまく行っていない人、自分に嫌なことをして来る人、陰で私の悪口を言ったり、あるいは何かあると私を攻撃し、傷つけることを言ったりしたりする人。その人のことを思い浮かべると心がかき乱されそうになる人です。私たちはその人のためにまず祈りたいと思います。家で悶々として、どうやって今後張り合うかと作戦を考えるのではなく、座ってその人の祝福のために心を込めて神に祈りをささげたい。そしてその祈りに導かれて、その人と会った時もその人を愛する行動を取りたい。その時、私は一人みじめなことをしているのではありません。それは天にいる私たちの父を映し出している姿です。私たちはその歩みによって自らが天の父の子どもとされていることを現わし、そのことで神に感謝をささげることができるのです。そして完全に向かう救いの道を前進しつつ、人々がこの私の行いを見て天におられる父の御名をあがめることに至る、そのような生活をささげて行くことができるのです。